

## 眠らぬ子

真っ黒い世界へ、幾艘もの小舟が進みだす。

櫂と波の音とともに、歌声が響いている。舟の上の者たちが、漕ぎの歌を歌っているのだ。

月に呼ばれて 光る者たち

いま我らが迎えに行く

殻の中では 産声聞こえぬ

光り続けろ

生きる印 我らに示せ

漕ぎ手は、一艘に4、5人乗っていたが、誰一人、乱れた動きをしなかった。

彼らは、海を知っていた。この、爪のように薄く、白い舟の動きも、もう何世代にもわたって伝えられ、その身にしっかり沁みこんでいた。

彼らは、ここら一帯の覇者、月を戴く島の土着民―アベドだった。その誇りは、彼らの雄大な腕の動きや、轟く歌声から、にじみ出していた。

そんな、海を肌で知るアベドたちであったが、その夜は、全員、顔に隠し切れ

ぬ緊張が浮かんでいた。

沖へ出ると、船首のアベドが、舳先にかかった石灯で照らされる前方を、立ち上がって見つめた。石灯には、陽の瞳と呼ばれる発光石が入っており、波に乗り上げるとき、からからと音を立てた。

アベドたちの歌はやんだ。彼らは、船首アベドと同じように、周囲を凝視した。船首アベドたちは、石灯に作られた四つの小窓のうち三つをしめた。

ふっと、闇が降りた。海と夜空との境はなくなり、アベドたちは暗黒に取り残された。

目が慣れて、星の瞬きが見えるようになると、どこかの舟のアベドが声を上げた。

海面下に、薄緑色をした、楕円の光が浮かんでいた。二つ、三つ、五つ、十と、さらにさらに見えはじめ、舟の上が慌ただしくなった。

「今月は、大量だな」

一人の男が、そう言って、上腕ほどの槍を手に持った。穂先が緑の光できらめいたが、それは、二又にわかれ、片方が短い、不思議な形をしていた。

「どの子か？」同乗する細身の女が訊ねる。

男は、くいつと顎で一つの光を示し、間もなく、海へ滑るように潜った。

槍を重りにしながら、男は光へ近づいた。光は、地底へ向かって緒のようなも

のを伸ばしていた。その緒の内部を流れる光の粒に、男は、しばし見とれた。粒は球体へ送り込まれ、煌々と海中を照らしていた。

そんな命の線を、男は、球を抱えるやいなや、あの槍でぷつりと切断した。緒は力を失い、諦めたように残液を吐いてあたりを濁らせた。

海面へ浮上した男が見たのは、布を広げて待つ細身の女だった。

「さあ、こつちに。他の卵もはやく回収しないと。この量じゃ、取り残しがおきちゃうわ」

女は、さっと卵を拭くと、舟の籠におさめた。そのときには、女の口調に急かされて、すでに男は海へと姿を消していた。かわりに、別の仲間である大柄な女が、卵を抱えて浮上してきていた。「この子、お願いね！」

そうしてアベドたちは、次々と卵を回収し、やがては海も、はじまりと同じ、どつくりとした闇に戻るのだった。

「取り残しはないね？」

海から顔を上げた男に、今度は大柄な女が、舟から見下ろして言った。豊かな肩の曲線が、再び開かれた石灯いしひの光に浮かび上がった。

「ああ、全部取った。確認した」

男は、濡れた顔を拭い、ちらとあたりを見て頷いた。

大柄な女は頷くと、「岸に戻るよ!」と、船上のアベドに指示をした。

「すごいわ! 六つも取った。先月は二つだけだったのに!」

男が乗船したはずみで揺れる中、細身の女は、縁に悠然と掴まりながら言った。

「海はたいそうご機嫌なようだ」

髪を高く結った男が、櫂を手に取り、漕ぎ始めた。彼の海を見る目は、穏やかだった。

だが、乗り込んだ男の方は、卵を見て、はっと息を呑んだ。

「おい、こいつ、動いているぞ!」

身じろぎをするように、卵の薄緑色の外膜が上下していた。大柄な女は、さつと櫂を船員に渡した。

「急ぐよ」女はこれだけ言った。

岸に上がると、他の舟も戻って来ていた。彼らは、せつせと卵の籠を降ろし、

浜の奥の小道にとまる馬車へ向かっていった。槍持ちの男は、逆輪に石灯いしひをくくりつけ、明かり持ちとして先頭を歩いた。

馬車の近くでは、一人の小柄な老人が待っていた。老人は、籠を持った彼らがやって来ると、にやにや笑った。

「まるで、海からはい出た死人みたいな顔をしているな、守りの人のみなさんよ

お

老人は言い、明かり持ちの男は、むっとして穂先を向けた。

「ふむ、お前の顔よりは、いくらかましたと言える自信があるね。歯を磨けよ」

男は言った。明かりに浮かび上がる老人は、朽ちた歯を見せ、おどけた顔をつくった。

「おいおい、誕生の日だって言うのに殺しをするつもりか？ 馬の目を読むこの俺様を、卵切りで刺すっていうのか？」

仲間の視線を感じ、男はさっと槍を元に戻した。

「これじゃ殺せねえよ。卵の緒しか切れねえ」

大柄な女が、「ねえ、ちょっと！」と叫んだ。彼女は、髪を結った男とともに、荷台に籠を積んでいた。

「これ、ここに置いて平気？ あんた、横転しないようにしておくれよ？」

「なに言ってる」老人が、手を叩いて荷台に近づいた。「俺たちは、最高の実績を買われてここにいるんだ。そんなほろつととれるかさぶたみたいなことはしねえよ」

老人は、ばりばりと膝を搔いた。そうして、馬車につながれている馬に、愛おしそうに手を伸ばした。

「ほら、こいつも、『信用せよ』と言っている。俺の相棒のエイネー馬は、嘘が

得意じゃねえからな。この目は真実しか語れねえのよ」

灰色のエイネー馬は、老人に信頼しきったつぶらな瞳を向けた。

明かり持ちの男は、ふんと鼻を鳴らした。細身の女が、「綺麗な馬よ」と言つて、男のつま先を踏む。いいかげん、喧嘩腰になるのはやめると、彼を小さく睨む。

老人は、相棒を褒められて上機嫌になり、欠けた歯を見せてにこにこ笑うと、御者台に飛び乗った。

「さあ、俺たち獣の人の晴れ舞台だ。いっちょ、かましてやろうじゃないか」  
彼は言うのと、口笛だけでエイネー馬を操作した。馬は、実に従順に、長い脚毛に隠れた広がる蹄で、地面をしつかと踏んで、浜を離れていった。

卵を取った守りの人たちは、しばらく海風に吹かれてその様子を眺めていたが、馬車が見えなくなると、大柄な女が言った。

「さあ、あたしらの仕事は終わった。食事をしに行かないか？」

とたん、仲間たちは歓声を上げ、輪を描いて足を蹴り合った。

「おごり？ おごり？ あなたのおごり？」

彼らは、こそこそ歌うように囁き合った。女は、大きな肩をゆすって呆れ笑った。

「わかった、わかった！」

仲間たちは、口笛を吹き鳴らした。大仕事を終えた彼らは、解放感でいっぱいになり、熱っぽくなっていた。だから、天へ向かって、嬉々として叫んでも、どれも文句を言わなかった。

「我が国、エイネー国よ、永遠なれ！」



老人が自負した通り、馬車は一度も立ち止まったり横転したりする様子は見せなかった。たとえば、整備の悪い石畳の道でも、エイネー馬の柔軟に広がる蹄によつて、ちゃんとたしかな道を通ることができた。

まわりには、波うつ海のように、丘がいくつも連なつて、こぼこぼ頭を出している。波と違うのは、斜面が段々になっていることだった。

この場所を、エイネーアベドたちは、育ての丘と呼んでいた。そして育ての丘こそ、馬車の目的地だった。

一つの丘の麓で停車すると、老人は、相棒にねぎらいの言葉をかけてから、斜面に作られた扉へ向かつて言った。

「やい、丘の守りの人よ！ 覚悟して聞け！海からたーいりように赤ん坊がやつて来たぞ！」

すると、待っていたかのごとく、扉はぱっと開かれた。

現れたのは、頬を上気させた、毛髪のない大男だった。彼は、馬車に山と積み  
れた卵を見るなり、目を見開いた。だが、すぐに気を取り直し、後からやって来  
た仲間に、「さあ、どんどん運べ！」と指示を出した。

「今月はやけに多いな……、いったいなにがあったんだ？」

守りの人の大男は、なにもない頭を撫でながら、獣の人に訊ねた。だが、答え  
を望んでいるわけではなかった。気持ちを落ち着けるため、言葉にせずには、い  
られなかったのだ。

気持ちが高ぶっているのは、獣の人も同じだった。それに彼は、もちろん大男  
の問いの答えを持っているわけではなかったので、「覚悟しろと言っただろ」と  
叫んだ。「そえより、他の出生地も多いのか？」

大男は、頷いた。

「まだ森からの赤ん坊しか来ていないが、夕飯も食べられねえくらいでんてこ  
舞いだよ！ この調子じゃ、イドウリ火山島と星の洞窟の赤ん坊も多いだろう  
な……。ああ！ 俺は明日、糸を絞られた蜘蛛の腹みてえにべこべこになってい  
るぜ」

「間違って、赤ん坊を食わねえようにな」老人は皮肉に言った。

「あんなちいせえのじゃ、俺の腹は満たせねえよ」と大男。



だが、彼も老人も、喜びを顔に浮かべていた。赤ん坊……そう、アベドの赤ん坊がこれほどたくさん生まれたのは、本当に久しぶりのことだったのだ。だから、どれほど忙しかろうが、自然と口が緩み、安堵の笑みを浮かべたのである。

そんな晩、口をむつつり曲げている男が一人いた。それは、卵が運ばれた先にある大洞にいる男で、巻き髭を生やし、ぎらぎらと二つの目を光らせ、紙束をもつて、卵を待ち構えていた。

彼の部屋に入った守りの人たちは、せつせと卵を、壁にあいた穴に入れていった。

「おい、いまもってきたのは、どっからきた卵ちゃんたちだ？」

見かけによらない言葉を髭男は使ったが、守りの人たちは、彼のことを十分わかっていたので、「海からよ、セイダ」と、淡々と答えた。

「ああ、磯の香りがぶんぶんするな。海だな！」セイダは、守りの人の言葉にかぶせて言った。

卵の入った穴の端には、数字が刻まれていた。セイダと呼ばれた髭男は、その数字と卵の様子を、あわせて紙束に記録した。彼は、この卵管理室で、赤ん坊の健康状態を診る仕事を担っていた。もう二十年も続けているこの仕事は、セイダに

ゆるぎない貫録を与えていた。彼は、卵管理室の主であり、赤ん坊の変化を、卵の揺れ一つ、温度一度、そして生まれてからは、髪の毛一本でも見逃さない、守りの人の大御所だった。

だが、そんなセイダでさえも、この卵の量には、こめかみに汗を浮かばせていた。やってもやっても終わりが見えず、次々と新しい卵がやってくる。

「応援を呼びましょうか？」

若い男がセイダに訊ねた。だが、セイダは首を振った。

「一人で十分だ。いままでもそうだったんだから」

「セイダ、夜明け前には、この子たちの〈育ての者〉がくるからね！」

「なに！？〈育ての者〉だと？ それまでに全員が孵化するとも思っているのか？」

だが、守りの人たちは次の仕事のためにばたばたと出て行ってしまった。

セイダは、黙々と卵の記録を続けるしかなかった。気が逸れて、漏れがあったら大変だ。

ぶつぶつ呟きながら次の卵に移ったセイダは、ぎよっとして身を強張らせた。

なんとその卵は、孵化の揺れを引き起こしていた。セイダは驚いたが、冷静になって、すぐさま、赤ん坊をくるむための布を持ってきた。

だが、赤ん坊は、柔らかな外膜を何度か押したのち、静かになってしまった。

セイダは、ほっと息をついた。壁に刻まれた番号を確認する。

「23番か。23番よ、お前はせっかちなな」

しばらくすると、他の出生地の卵が到着した。イドゥリ火山島からの卵は、みんな力強い脈を打ってほんのり暖かく、星の洞窟からの卵は、どれも静かな冷たさをまとっていた。

どの出生地も、やはり、大男が言った通り、多産だった。セイダは、記録をし続けるうち、卵と自分との境がなくなる感覚を覚えた。やがては、セイダは、世界に自分たちしかないように思えた。新生な命と、老いの迫る自分との無言の対話は、セイダに、仕事を超越した、神聖な満足を与えた。これこそ、セイダが一人で仕事をしたかった最大の理由だった。

彼は、赤ん坊という存在を、心から敬畏していた。



はじめに、腕が突き破って出てきた。白緑の液体にまみれたそれは、力強く、もう片方出てきた。そのあと、空気を裂かんばかりの泣き声が響き渡った。

部屋の隅でうつらうつらしていたセイダは、がばっと起き上がって、泣きはらす赤ん坊のもとへすっ飛んでいった。

「結局、あんたが一番か」

セイダは、彫られた「23番」の文字と真つ黒な髪の方やを見つめた。坊やは、セイダの耳を壊しそうなほど一生懸命泣いていた。

セイダは、赤ん坊に張り付いた膜を手際よく取り、体を拭いて、布でくるんでやった。

と、思いきや、あつちからもこつちからも、まるでこの赤ん坊が皮切りだったかのように、次々と他の卵が孵化し始めた。

長年、卵管理室で働いていたセイダだったが、十人以上の赤ん坊がぴったり一緒に誕生の叫びをあげたこの瞬間は、さすがに鳥肌が立った。だからセイダはこの黒髪の赤ん坊には、なにかあるのだろうかと思わずにはいられなかった。

けれど、それで手を止めるセイダではなかった。彼は、じつに十五人の赤ん坊の世話をした。

ようやくひと段落ついたとき、セイダは卵管理室の入り口で、泥のようになって座り込んでいた。時の感覚がなく、あれから一呼吸しか経っていないのではなにかと思った。

だから、だれかが部屋の入り口に立ったとき、それが起こるのに正当な時間であると思わなかったし、ましてや、存在に一切気がつかなかった。

「ひゃあー！」

その者も、くたびれた雑巾みたいになっているセイダに、全く気がつかなかった。甲高いその声に、セイダはいらいらと顔を上げた。

「なんだ？」

「ああ、あの、大丈夫ですか？」

立っていたのは、枝のようにひよろ長い青年だった。目ばかり大きく、首も、腕も、足も、頼りなさそうにふらふらしている。頭には、整えていないこんがらがった髪の毛が乗っかっていた。

その情けない姿に、セイダは、いつそういら立ちを募らせた。さらに、こんな忪のなさそうなやつに『大丈夫ですか』などと問われた自分にも、腹が立った。

「平気だ。それより、なにをしに来たんだ？」

セイダは、髭を絞って言った。

「夜明けに、ここへ来るようにと言われたので」

「……ということは、お前は、〈育ての者〉なのか!？」

セイダの頭皮は、縮み上がった。

青年は、自信がなさそうに、こっくりと頷いた。

「この中の一人を育てると言われてきたんです」

セイダは、ため息をついて目頭を抑えた。ふらふらと立ち上がる。

「お前、名前は何て言うんだ」

「〈卵取り〉の……じゃなかった、〈育ての者〉のピクランタです」

「異動になったのか」

ピクランタは、細い首の後ろをぽりぽり搔いた。

「ええ。前は、森で卵を取っていたんです。……あのう、こういうことを聞くのもなんですけど。はじめてなもので……。そのう……」

「なんだ？」

「育てるって、大変ですか？」

セイダは、がっくり力が抜けた。だが、青年の大きな目が、溶け落ちそうなくらい不安で潤んでいるので、これだけ言った。

「筆舌につくしがたい」

ピクランタは、小さく息を吐いた。セイダは、だが、赤ん坊たちのほうに目を向けた。そして、青年の背中を押し、ずらりと並ぶ穴へ近づけた。

「なあ、ピクランタ。お前は、どの子を育てろと言われた？」

セイダは、青年の動揺を鎮めようと、軽く話しかけた。だが、青年の「ええと、23番です」という答えを聞くと、管理室の主は、心の中で頭を抱えた。

「なんだって、23番？」

「はい、23番」

セイダは渋ったが、ピクランタが、なにか不味いことでも言ったかと、さらに

身を縮ませるので、何でも無い風に、23番の穴へ案内した。

「こいつは、一番に孵化した子でな……」

覗き込んだピクランタは、「わあっ……」と声を上げた。

「なんて、真っ黒な瞳！」

その子は、純黒の瞳で、初めての世界を見つめていた。

ピクランタは、真っ黒い円の中に、自分がいるのを見つけた。青みがかった白目は純粹に輝き、傷一つない丸い額に、柔らかな漆黒の髪が映える。

そのときピクランタは、夜の闇を思った。目の前にあるのに、掴むことのできない、絶対的な黒を。

だが、セイダは不満そうに言った。

「こいつ、一番に孵化したのに、ずっと起きているんだ。まるで、瞼がねえみたによ。いいかげん寝たらどうだ、お魚くん」

セイダは、23番の頬を優しくはじいた。

「お魚くんなんてだめです。こいつ、ナツシュトールですよ」

突然のピクランタの言葉に、セイダは彼を二度見した。

「あ？ ナツシュトール？」

「そうです。黒目がナツシュトールの実にそっくりじゃないですか。やあ、ナツシュ」

ピクランタは、ナツシユの手に指を近づけた。ナツシユトールは、エイネーに生える低木の名前だった。春になると、小指の先ほどの、堅く黒い実をつける。ちょうど春であるいまには、ピッタリの名前だとピクランタは思った。

「俺より詩的な仮名をつけたな」セイダは腕を組んだ。

「僕、陛下から真の名前をもらうまで、〈育ての者〉から番号で呼ばれていたんです。102番だったんですけど、みんなに、生まれたときから102歳だったと思われて、あだ名が長老だったんです」

セイダはげらげら笑った。ピクランタも笑ったが、「それはそれは嫌だったんですよ」と、ナツシユを見つめた。

だが、そのとき、突如彼は、何者かに突き落とされた感覚に襲われた。

目の前で無防備に息をし続ける赤ん坊は、これから自分の手の中が安全な場所となる。それに気づいた時、自分の愚かさで、彼の命を落としかねない、壊しかねない恐怖が、胸の中に巢食った。迫って来たのは、究極の、名前のない重さだった。

「……ピクランタ、よく考えろ」

青年の沈黙に気づいたセイダが言った。

「そいつを育てると、お上に言われたんだろうが、決めるのは、やはりお前自身だ。俺は、お前たち〈育ての者〉が、途中で投げ出すのを見たくねえ。その子は



……言いたくねえが、かなり手を焼くんじゃないかとみてる。だから……」

「だけど、どの子も一緒でしょ？」

ピクランタは何も考えず言ったが、これにセイダは、思わず髪の毛を逆立てた。

「一緒な子などいないっ、馬鹿！　ここに居るのは、あぶくを出している、ただのちっこい人形じゃないんだよ！」

セイダは、はっとして正気に戻った。ピクランタが首をすくめていた。

「……すまねえ、疲れてるんだ」髭男は言った。

「僕も、言葉が悪かったです。僕はただ、赤ん坊はみんな手を焼きますよね、って言いたかっただけで……」

セイダは唸って、自分の頭を叩いた。

「俺はなあ、心配なんだよ。〈育ての者〉ってのはよ、子どものために菌食いし  
ばってやっていく、その覚悟が必要なんだよ。ただ食べさせればいいのか、おし  
め換えればいいんじゃない。育てるのは、一つの命じゃなくて、一人の命だから  
だ。わかるか？　それは、生半可な気持ちで手え出しちゃ、ほんとにいけねえっ  
てことだよ」

黙っているピクランタに、髭男は近づいた。

「だから、はじめのはじめに、ようく、ようく、考えなきゃならねえんだ。お上  
の指示だろうがなんだろうが、育てるか育てねえかは、お前が決めなきゃならん

のだ。いいか、お前自身なんだぞ。他に誰も、お前の気持ちや覚悟の度合いは、わからねえからな……」

「……。あの、僕は、蝶々結びができないんです」

鼻の下をこすりながら、唐突に青年は言った。セイダは眉をひそめたが、彼の続きを待った。

「字も汚いから、友人に心配されているんです……。それでも、子どもを育てることはできるんですか？」

セイダは、顎を搔いて、青年を正面から見つめた。

「あんた、23番のことをどう思ってる。好きか？」

ピクランタは、静かな笑みを浮かべた。脆弱で、哀し気で、それでいて、憧れと愛に満ちたその笑みに、セイダは頷いた。

「であれば、それを23番にぶつけることだ。蝶々結びよりも大事なことを、2

3番はお前から学ぶだろう」

セイダは、青年の肩を叩いた。

「それに、育ては、一人の責任によるものじゃない。たくさん助けを求めているんだ。……俺は、どうしても一人で突っ走ってしまうだけだよ」

ピクランタは、こっくりと頷いた。セイダの熱く重い手が、ピクランタを、淀んだ憂慮の海から引き揚げた。

「……ありがとうございます」

セイダは、「よし」と言って、彼の肩を二度叩くと、穴へ近づいた。

「お前を信用することにしたぞ。二十三番は——ナツシュは、ピクランタに任せよう。お前がこの子に当たったのも、巡り巡ってのもんだろうからな」

セイダは、ナツシュを穴から出してやった。「気をつけて抱くんだぞ。尻に手を添えて……首の下にも腕を……そうそう」

はじめてナツシュを抱いたピクランタは、細かく力の入れ具合を調整すること  
で忙しかった。赤ん坊は、とても温かかく、崩れそうなほど柔らかかで、小さかつ  
た。まるで骨入りの液体みたいだと、ピクランタは思った。

「こいつは海生まれだ。ちゃんと誕生日を覚えておけよ。花の月（四月）だから  
な。……ありゃ？ こいつ、引き取りも第一号になっちまったな」

「ありがとう、セイダ……」

セイダは、慈しみの目を赤ん坊に向けるピクランタを、じっと見つめた。

「〈育ての者〉の言葉に、こんなのがある。『育てに、もしだめだったら、存在  
しない。失敗もなく、やり直しもない。あるのは、ただその一瞬だけ』」

「ええと……、よくわからないんですが」

「言いたいのは、一瞬がすべてだということだ。巢立ちまでの十二年間は、あつ  
という間に終わる。お前とそいつが楽しければ、それでいいんだ。……じゃあ、

なにかあったら助けに行くからな。健闘を祈るぞ」

セイダとピクランタは、ナツシユをはさんで、抱き合った。ナツシユは、虫のようにもぞもぞ動いた。

ピクランタは、ゆっくりと、しかし、よろけることなく、卵管理室を出て行った。

セイダの仕事は、ここまでだった。彼は一つ、詰めていた息を吐き出した。だが、眉間には、険しい色が浮かんでいた。

(お魚くん、眠ってくれるといいがな)



セイダの心配事は、的中した。ピクランタは、保育部屋と呼ばれる、小さな洞へナツシユを運んだが、壁の穴に寝かせても、ナツシユは長く目を閉じなかった。

その習慣は、5年が経っても変わらなかった。ナツシユは、夜遅くまで起き、ピクランタが知らない間に寝ていた。というより、ピクランタが先に寝落ちしていたから、知らないだけだったが。

それに加え、セイダが言った通り、ナツシユは非常に手がかかった。それというのも、彼には、いつもどこかへ行ってしまう癖があったからだ。

ということで、ピクランタが「ナツシユ！ どこいった！」と叫んで育ての

丘を駆けまわるのは、一種の名物になっていた。

とある初夏も、そうやってピクランタは、膝丈の下半身服であるルダラを持って、育ての丘中を走り回っていた。

「ナツシユを見かけませんでしたか!？」

彼は、保育部屋の一つを覗いた。

「しーっ!」

中にいた女が鋭く言った。「あんた、寝起きの子どもぐずりを聞きたいなんて、悪趣味すぎるわよ」

見ると、壁穴に三人の子どもが寝ていた。

「……失礼しました」

「あんたの子、またいなくなったの?」女は、呆れと心配を浮かべた。

「大丈夫です。まだ五十回目くらいですから」

「一か月に五十回でしょ。あんた、あの子に、鈴つきの首輪とかつけたらどう?」

だが、すでにピクランタは去っていた。「ナーツシユ!」と叫びながら。

「ナツシユ、またどっかいったの?」

女は、どきっとした。子どもの一人が起きていた。すると、二人の子どもも、穴から出はじめた。

「見つけに行かなくちゃ!」

「大変大変、ナツシュが迷子よ！」

「大変大変はこっちよつ。ああ！ ピクランタ！」女は、子どもたちに押されながら叫んだ。「なんてことしてくれるのよ！」

一方、ピクランタは、育ての丘の斜面に作られた段々に出ていた。

この段々は、子どもたちの遊び場としてつくられたものだった。アベドが寝転がれるほど大きい、クウエケト石という丸い石が敷き詰められたこの場所は、わずかな弾力性があり、滑らかで気持ちの良い踏み心地がした。この石は、つくりの人と呼ばれる、ものづくりを仕事とするアベドたちによって、平らに完璧に研磨され、すき間や段差なく、地面に埋め込まれていた。つくりの人は見た目にもこだわり、クウエケト石を、淡い桃色や黄色、橙色、水色などに塗り分け、鮮やかに楽しい場所にした。

そんなクウエケト石の庭で、今日も大勢の子どもたちが遊んでいたが、ピクランタは、ナツシュを見つけるより先に、誰かに声を掛けられた。

「なあ、見てくれよ。かぼちゃの新しい芸だ！」

庭の木にもたれかかって、太った男が胡坐を搔いて座っていた。足の上に、これまた大きな赤ん坊を立たせている。彼は、赤ん坊を振り子のように動かして、こう歌った。

ぼくは、かぼちゃ

ぼくは、かぼちゃ

食べ物じゃ ないけど

ぼくは、かぼちゃ

ぼくは、かぼちゃ

このおなかには

いっぱいかぼちゃがつまってる

だから こんなに 大きいの

かぼちゃと呼ばれた赤ん坊は、歌に合わせて「うっ、うっ」と声を上げた。

「な!?! 一緒に歌ってくれるんだ。かんわいいだろう! 俺のかぼちゃ!」

「ああ、ガルド、今それどころじゃないんだ。ナツシユを見なかったか?」

「ナツシユ? 下着一丁なのか?」

ガルドは、ピクランタが持つルダラを見て言った。

「ああ。どこかで走り回ってると思うんだけど……」

ガルドは、あたりを見渡した。

「あそこにいるの、そうじゃないのか?」彼は顎をしゃくった。

人形を持って暴れ回る子どもの集団を、彼は示した。その手前で、彼らを見つ

める太ももから下が丸出しの男の子がいた。黒髪をなびかせるその子は、ナツシュに間違いなかった。

ガルドに礼を言っていると、ピクランタはナツシュに近づいた。すると、数歩手前で、ナツシュは飛びついてきた。

「ピクランタ、僕、竜が欲しい！」

「え、竜!？」

ピクランタは、こつそり唇をかんだ。なんてことだ、おねだりの時間がきたぞ、と腹をくくった。

ナツシュが注目するさきには、竜の木彫りをもった子がいた。

だが、ナツシュは首を振った。

「違う! あれじゃなくて、生きてるやつ! ピクランタなんかぬかしちゃうくらい、でーつかいやつだよ! で、アケラスと同じで、白いのがいい。ぜーったいに!」

ナツシュは腕を広げ、二重顎まで披露した。

「とにかく、ルダラをはけよ。な?」

ピクランタはしゃがんで、ナツシュが履くのを手伝おうとした。だが、当のナツシュは、竜の玩具を気にして、何度も足を通すのに失敗した。

「ナーツシュ、お尻を虫に齧られちゃうぞ」



「じゃあ、竜を買ってくれたら、ちゃんと履く？」

興奮してこんがらがって、ナツシュの文法はめっちゃめっちゃになった。

ピクランタは、苦笑して立ち上がった。

「竜を買うのは難しいなあ。獣の人しか扱えないから。第一、そんなでかい竜、保育部屋に入らないよ」

「でも、アケラスは、本当にいたでしょ？」

「そうだよ。エイネーの一番最初の魔導師長だ」

ピクランタは、ルダラを履いたナツシュの手をとって立ち上がらせた。

「じゃあ、竜も、ちゃんとアケラスのおうちに入っていたでしょ？」

「うーん、魔導師様は、こことは違う場所に住んでいるんだ。魔導師の木について、地下には何百もの世界が通っているっていう話で……」

「ずるーい！」

「ずるくないよ。魔導師様は、魔法の力を持っている方たちなんだ。力のあるアベドは……」

「僕も力あるよ。ほら、こんなに」

ふん、とナツシュは、二の腕に力こぶを出そうとした。ピクランタは、何の変化も起こらないその腕を下ろさせた。

「その力じゃない。魔力だよ。魔法が使えなきゃだめなんだ。魔導師様は、赤ち

やんのときから魔導師の木で過ごすんだ。これは、変えることのできない、最初から決まってることなんだよ。……さ、片づけをしに行こう。散らかしたまま出てきたじゃないか」

「ふんっ！ つまんないっ」

ナツシュは逃げ出した。その速さと言ったら、水の中の小魚だった。慌てたピクランタは、つい、こう口走った。

「待て待て待て！ じゃ、竜を見に行かないか！」

本気か？ と心の中のもう一人の自分が言った。わずかに後悔したが、もう遅い。ナツシュは、目を輝かせて戻って来た。

「なに？ なんて言ったの？」

「竜を見に行かないかって言ったんだ」

ピクランタは正直に言った。とたん、ナツシュは、くるくると踊り始め、きゃあきゃあ叫んだ。

けれど、すぐに表情は暗くなった。

「でも、アケラス、死んだでしょ。竜も死んだんじゃないの？」

「おい、亡くなっただって言いなさい。そうだよ。けれど、竜の骨が残っているんだ。すごく立派で……」

あとは、ナツシュの歓喜の叫びでかき消された。彼は、保育部屋へ駆け戻りな

がらこう言った。「今日は竜の日、竜の日だあ〜！」

ピクランタは追いかけてしようとしたが、子どもたちが集まっていることに気がつかず、つんのめった。「わ、どうした？」

「竜、見に行くの？」

並んだたくさんの子どもたちの期待の顔に、ピクランタは、話す場所を間違えたことに、いま気がついた。

アケラスの竜への道は、少し遠かった。馬便という、大型の馬車である公共交通機関に乗り、アバルバン谷というところで降りて、あとは徒歩だった。

「アバルバン谷から、アケラスの竜が見下ろせるんだ」と、ピクランタはナッシュに教えた。

ナッシュは、素直にピクランタと手をつないで、じっと森の中を観察した。ピクランタは、保育部屋よりも外へ連れ出したほうがよっぽど楽かもしれないと思った。

ナッシュの宣伝のおかげで、この遠足には他の子どもたちも参加した。あのガルドもついてきた。

「でも、かぼちゃは行きたいって言ってないだろ？」

ピクランタが言うと、ガルドは、「ああ〜！」と抗議した。

「そんなことないでちゅよね？ 見ろ、こんなに足をばたつかせてる。お前が触発させたんだ。やくれやれ！」ガルドは、責めるようにピクランタを睨んだ。

後ろで、女の子がアケラス竜の歌を歌っていた。

アケラス竜 谷に眠る

北の奥地の 爪痕の底

アバルバン谷から ほんとは見ている

みんなのことを 最後まで！

お昼近くになって、彼らは休息をとった。普段、保育部屋からでない子どもたちも、開けた大地で、兎のように跳ね回って遊んだ。

広がる草地の先には、真っ白い崖があった。崖は、天を指さすように伸び、遠くの青紫色になった山地を左右に区切っていた。

「あの崖を上ると、アバルバン谷が一気に見下ろせる。そこに、アケラスの竜が埋まっているんだ」

風に吹かれて心地よくなりながら、ピクランタはナツシュに教えた。

だが、そこに自分の子どもがいないことに気づくと、稲妻の速さで飛び上がった。

た。

「どこいった?! ナツシュは？」

大捜索がはじまった。すると、一人の守りの人が、「あの崖に上っているのはだれだ!？」と叫んだ。

見ると、黒髪の男の子が、崖の先端へと歩いていった。近くの樹に近づき、興味深そうに触れている。

ピクランタは、心臓が飛び出そうだった。

「ナツシュ! そこから動くな！」

だが、ピクランタが駆け出した瞬間、他の子どもたちもついてきた。

「追いかけてよう！」

「あたしもいく！」

「待って待ってー！」

守りの人たちは悲鳴を上げた。子どもたちと守りの人たちによる攻防がはじまり、その場は大混乱になった。

ピクランタは、ナツシュをこの手で掴むことしか考えていなかった。あの黒髪の子が落ちる瞬間なんか、考えたくもなかった。

ナツシュは、樹の向こうのなにかを見ていた。半ば逃げ腰になって、樹の影に隠れている。

ピクランタは、必死に駆け上がった。ナツシュは、ずるっと力が抜けたように、尻もちをつく。

なにかが起こっている。その予感がピクランタの胸に浮かんで、焦らせた。

「ナツシュ！」

はっと、ナツシュの漆黒の目がこちらを向いた。

「なにしてる！　なんで……」ピクランタは咳き込んだ。彼はひそかに、自分の衰えに驚いた。

「あ、あいつら、いる？」

ナツシュは、がたがた震えていた。ピクランタは、「はあ？」と汗を拭った。

「だれもいないけど」

まっさらな頂上は、ピクランタの気持ちを落ち着かせた。そして、その先の光景に引き寄せられ、彼は、一步二歩と歩みを進めた。ナツシュは、なにか言おうとしたが、声が出なかった。

頂上へついたピクランタは、目の前の光景に息をのんだ。

「おわあ！　すっげえなあっ……！」

眼下には、数百種の緑を散りばめた森が広がっていた。まるで、仕立ての良い絨毯のように、地面の起伏に沿って柔らかに波うっている。その端は、遠く、砂地がむき出して赤くなった山の裾にまで広がっており、その先には、霞んだ青い

山々が延々と続いていた。

だが、ピクランタが感銘を受けたのは、その手前にそびえる、大小さまざまな白い塔だった。大自然の中に突如として存在するその塔は、日の光を反射して、白い荘厳な光を放っていた。

ピクランタは、恐れおののいた。あれこそまさしく、目指してきたアケラスの竜の骨だった。

「すごいな……。おい、ナツシュ！ 見たか!? アケラスの竜だ！」

ピクランタはその場に立ち尽くした。だが、ナツシュは、警戒しながら、やっとの思いでピクランタの傍に立った。彼はピクランタの服の裾を、ぎゅっと掴んだ。

「ほら、あの綺麗に並んでいるのは、たぶん肋骨で、その左のごつごつした塊は、きつと頭蓋骨だよ」

ピクランタは、だが、ナツシュの異変に気がついた。

「どした？」

「かえる」

「え」

「か、え、る、のっ！」

その強引な口の利き方に、ピクランタの中でいまままで抑えられていた小さな焦燥が、怒りとなって膨らんだ。

「おい。危険なところに一人で来て、すぐさま『帰ろう』かよ。お前、いろいろ勝手すぎるぞ。いいか、今度は大人しく、ここでみんなを待ちなさいっ」

続けようとしたが、ナツシユは、首を振り続けた。「かえるかえるかえるかえる！」

とうとう、ピクランタも限界に達した。彼は、ナツシユの腕を掴んだ。

「いいかげんにしろ！ 振り回されるのは、もうたくさんだ！ 頼むから、みんなみたいにじっとして、おとなしく言うことを聞いてくれ、ナツシユ！」

ナツシユは叫んで腕を振りほどいた。

「ピクランタなんか大っ嫌いだ！」

彼は、やってきた子どもたちを押しつけて、崖を駆け下りた。

「なあに、怒られちゃったの？ ナツシユは？」

一人の守の女が、子どもの手を引いてやって来た。

「あいつが言うことを聞かないのが悪いっ」

「ちょちょ、ねえ、ちょっと」

女は、追いかけようとするピクランタの腕を掴んだ。

「とりあえず、あなたが落ち着きなさいな。あたしたちのことはいいから、落ち着いてから、二人で話し合いをしなさい。あの子を無理に連れて来なくてもいいから」

「お話し」女の手を握る子どもが言った。



「そう。お話し。さ、アケラス竜は見えるかな？」

その場に取り残されたピクランタは、騒ぎながらも大人しく守りの人と一緒に竜を見る子どもたちを、羨ましく思った。同時に、軽い絶望を感じた。

彼は息を吐いて、坂を下った。

ナツシユは、昼ご飯を食べた場所まで戻っていた。膝を掴んで、息をついているが、その格好がおかしくて、ピクランタの怒りは、虚しさに変わった。

だが、ナツシユは、ほろほろ涙を流していた。「かえろうよおおお！」

ピクランタは、ぎよっとしたのと同時に、罪悪感を抱いた。

「どうしたんだよ？」

訊ねても、ナツシユは泣くばかりだった。ピクランタは、彼を抱きかかえた。

「わかったよ。俺が悪かった。本当にごめんな。それで、どうしたんだ？ どうして帰りたくなったんだ？ ……話してくれないか」

ナツシユは、ぐずぐず首を振った。

「言いたくないのか？ ……じゃあ、当ててやろう。骨が意外に怖かったんだな？ それか、あそこが高すぎてちびっちゃいそうだったんだな？」

ナツシユは、もっと強く首を振った。

「……じゃあ、なんだ？ あそこに行く前に、何か見たのか」

ナツシユはじっとしていたが、やがて、こっくり頷いた。

「……何を見たんだ？ 野生の獣？ ……あ、もしかして、魔法動物か!？」

「……魔法動物って、なに」ナツシユはか細く訊ねた。

「魔力を持った生き物だよ。姿を消して、いたずらを仕掛けたり、呪いをかけた  
りする、怖い生き物さ」

ナツシユは、しばらく考えたのち、「たぶん、そうだったのかも」と答えた。

「どこか、変なところはないか？ 怪我は？」

ピクランタは、ナツシユの顔をのぞき込んだ。どこも傷はなかったが、ナツシユはただ首を振って、「かえりたい」と言うのみだった。

二人は、そうしてアバルバン谷を後にした。帰り際、ナツシユは言った。

「魔法動物って、アベドのかたちしてる？」

「え？」ピクランタは、体を強張らせた。「いや。そんな魔法動物は、聞いた  
ことないな」

「そう」

それ以降、ナツシユはずっと、ピクランタの服の裾を掴んだまま、離さなかつた。

そんな彼の口が開いたのは、夜だった。保育部屋に戻って、ピクランタが読み聞かせをしようとしたときだった。

毎回寝ないナツシユに、ピクランタは読み聞かせをしていた。一番のお気に入り

りの絵本は、『大魔導師アケラス 虹色鳥を追って』だ。赤い枠組みの中、真っ白い巨大竜に、緑の髭をたくわえた立派な男が乗っている。

その本を持ってくると、ナツシュは、だが、いやいやと首を振った。

「どうして？ 好きだったじゃないか」

「もういい。捨てちゃってもいいよ」

ピクランタは、眉根を寄せた。

「……おい、まだ話していないことがあるだろ」

「ない」

「そうか。……魔法動物のことが気になっているのか？」

ナツシュは、わずかに目をそらした。

「なに言っても、信じる？」

布団を口元に引き寄せながら、ナツシュは言った。

その目に真剣さを見たピクランタは、守りの人特有の誓い文句を言った。「守

りの人の主、あるじへ<sub>ベニユウス</sub>にかけて」

「……。……崖の上にね、アベドがいたの。でも、そのアベドを見たときね……

目が、見えなくなっちゃったの」

ピクランタは、すぐに言葉を発せなかった。

「そ、それは、どういうことだ？ い、いまは、いまは見えているのか？」

「うん。ピクランタの顔、見えるよ。でも、あの変なアベドを見たときは、……見えなかった。眠ったときみたいに、真っ暗になった。そのときから僕……、僕、きぼちわるい」

ピクランタは、急いで彼を穴から抱き上げた。

「ピクランタ、僕、死ぬ？」

「え？ だ、大丈夫、死にはしないさ」

言いながら、ピクランタは、どうすればいいかわからなかった。とりあえず、落ち着かなければならない。ナツシュの額に手を当てる。

「熱は、なさそうだな」

「薬の人、呼ぶの？」

「いいや、お薬をつくるアベドは呼ばないよ。たぶん、怖すぎただけなんだ。俺も、ちよつとぞくつとしちゃったしな。今夜は、食堂洞でお菓子を食べようぜ？ な、そうしよう」

「うん。フーラツカンにしよう。サクサクのお菓子」

「ああ」

「だっこしたままにしてね」

「……ああ」

それ以降、ナツシュは、そこらじゅうを走り回ることをやめた。

ピクランタは真相を探るべく、同僚に相談を持ちかけたり、薬の人に頼んでナツシュを診察してもらったりした。

だが、結局わからずじまいだった。これがそれほど問題にならなかったのは、ナツシュの視力が奪われたのが、そのアベドを見たときだけで、あとはいっさい支障がなかったから、というのもあった。

そうしてこの出来事は、時とともに風化していったのである。

けれど、ナツシュの中では、その不思議な者たちを眠りのアベドと名付けるほど、確実に大きな問題となっていたのである。